

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
 大学院生研究  
 2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科・社会学専攻 博士課程前期課程2年	廣本由香	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	社会学部・教授	関礼子	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	福島第一原発事故の放射能汚染をめぐる母子避難に関する社会学的研究		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科・社会学専攻・前期課程2年	廣本由香	
研究期間	2013 年度		
研究経費	(支出金額) 200千円 / (採択金額) 200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、一連の福島原発事故の広範な放射能汚染による「母子避難者」を研究対象とする。母子避難者とは、避難を指示されていない「自主的避難等対象区域」や放射線被曝の「ホットスポット」地区から、子どもの身体への影響を理由に、夫を地元に残した状態で避難する母子を指す。母子避難者の避難に至るまでの過程や避難生活で生じる「被害」についてヒアリング・データをもとに明らかにし、母子避難が孕む社会学的な問題を環境社会学とジェンダーの視点から論じる。本研究では、自治体として、強制避難者より自主避難者を多く受け入れており、自主避難者を中心にしたネットワークが築かれているという特徴を持つ佐賀県鳥栖市を主たる調査地に設定した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[母子避難] [被害] [揺れ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

自主避難者(母子避難者を含む)とは、福島第一原発事故で指定された「避難指示区域」ではない「自主避難等対象区域」や「ホットスポット」と考えられる市町村から個人の判断で避難した人々を指す。自主避難者は、支援制度のなかで自主避難したとしても、「自主的」であるがゆえに、「避難者」という制度的カテゴリーから部分的にずれた存在であり、「自主的」であるがゆえに「避難者」という制度的カテゴリーに入れられることに葛藤した。また、自主避難者が被害の声をあげづらい状況がある。制度的賠償・補償や被害の程度を基準にして決められた「強制避難者」、福島県・自主避難等対象区域からの「自主避難者」、関東圏からの「自主避難者」という拘束的で排他的な枠組みは、「強制避難者」の問題だから重大であり、「自主避難者」の問題だから軽微であり、ぜいたくな悩みであるという認識を生む危険性がある。

さらに、「原発避難」に対する「語りがたさ」は広く存在しているが、自主避難者の「語りがたさ」は、そもそも自主避難者が自らの「避難」を語る機会が少ないこと、福島県以外からの自主避難者が「避難」を語ることが社会的に期待されていないことが背景にある。自主避難する必要がないと判断した家族、自主避難したくてもできない家族、さらには同じ自主避難者といえども、それぞれの家族が抱える「避難」の背景や動機が異なることに対する配慮であり、優しさの表れでもある。避難生活が長期化すると、「避難者」であっても、自活への意識やいつまでも「避難者」ではいけないという自立心から、自主避難者は語らなくなる傾向がある。

このような「語りがたさ」を抱える自主避難者の声を拾いあげ、避難をめぐって揺れ動く心性に注目することで、これまで社会で等閑視されてきた福島原発事故の被害の個別性や多面性を明らかにした。本研究では、社会的に「見えにくい」自主避難者の心性から、賠償制度の枠から外れた被害、いわば被害として認識されにくい被害について考えた。

そこで本研究では、3つの自主避難の「揺れ」に焦点を当てた。1つ目は、自主避難者の避難の選択をめぐる「揺れ」である。この「揺れ」は避難を決断したとき、住宅支援の延長のとき、夏休みや年末の帰省シーズン、子どもの学年が変わる年度末や新年度など、さまざまな選択の局面で見られた。避難を決断した理由や避難後の状況など、それぞれの選択過程での「揺れ」を析出することで、自主避難の被害の個別性・多面性を明らかにした。2つ目は、「避難者」であるというアイデンティティをめぐる「揺れ」である。自主避難者は支援制度のなかで避難している以上「避難者」とみなされるが、「悲惨な体験」の「重さ比べ」(宮地尚子, 2011, 『震災トラウマと復興ストレス』岩波書店.)やポジションリティの観点から自主避難者自身は「避難者」ではないという意識もあり、その齟齬で揺れる。3つ目は、「語りがたさ」を抱える自主避難者が震災経験や避難経験を語る時、「語れないこと/語りえること」のあいだで「語りがたいこと」擦り合わせる作業をする。そのときの心性の動きを「揺れ」と捉えた。

本研究では、調査地である佐賀県鳥栖市の自主避難者(強制避難者1名を含む)の「語り」を聞き取り調査で拾い上げたほか、自主避難者と共に聞き書き集『とすのつむぎ』と写真集『とすのうた』を作成した(関・廣本編 2013)。そのなかで自主避難者は震災経験や避難経験を自らの言葉で語り、自らの言葉で書き綴ることによって、新たな言説を生成した。聞き書き集を通じた自主避難者の新たな言説を「生成的言説」(Gergen.K.J, 1999, *An Invitation to Social Construction*, London:Sage.)という概念で捉え、社会的に共有される「定型的物語」(浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』勁草書房.)に代わるオルタナティブな物語・言説として、その新たな可能性を考えた。

## 研究成果の概要 つづき

自主避難者の「原発避難」に対する語りは減っていく状況にある。このまま自主避難者の語りが失われていけば、賠償レベルの被害だけが紋切り型で語られ、被害の外延が形成されていく。その外延の外に位置付けられてしまった自主避難者や潜在的な自主避難者の被害は「自主避難なんて一部の特殊な人の問題にすぎない」「もっと辛い状況の人たちがたくさんいる」と軽んじられてしまう。賠償云々ではなく、福島原発事故がもたらした個別的・多面的な被害を社会に示し、明らかにしていかなければならない。そのためにも、自主避難者の「語りがたさ」と対峙し、「語りがたさ」を生む社会状況に加え、自主避難者の心性の動きも追究していく必要がある。

また、「被災者」とみなされない人々や認定される被害を負っていない人々のなかにも、見えない被害や心の傷を負っている人はいる。しかし、このような可視化しにくい被害は社会問題として扱われることは少なく、個人的な悩みとされ、まわりの共感を得られずに、等閑視されてきた。沈みかけている自主避難者の苦難の経験を見過ごさないためにも、避難の是非や、可視化できる避難者の状況などを議論し、客観的な数値を出すだけでなく、避難者個々の生活に交わりつつ、対話し続けることが必要である。

本研究では、賠償的枠組みから外れた「揺れ」を被害の一端として提示したが、自主避難者は経験された「揺れ」を、必ずしも賠償に馴染む被害とは捉えていない。けれども、私が本研究を通して思うのは、賠償云々ではなく、自主避難者の「揺れ」は原発事故がもたらした被害であり、苦難の一端であるということである。

2013年5月、写真付きの詩集『とすのうた』を佐賀県鳥栖市の被調査者と共同製作した。『とすのうた』は、母子避難する家族の避難生活を綴った記録集である。原発事故で失ったものや得たもの、避難生活での苦しみや楽しみ、子どもへの愛情などが温かい写真と詩で表現されている。編集作業は被調査者と繰り返し連絡を取り合い、納得のいくまで話し合い、何度もやり直しながら進めていった。被調査者とやりとりを重ねることで、通常のヒアリングでは語られない話を採取しうるなど、多くの発見が得られた。

2013年9月、鳥栖市に母子避難する被調査者と共に冊子『とすのつむぎ』を作成している。この冊子は、被調査者が震災当日から現在に至るまでに経験したことや今後の生活について申請者が聞き書きした記録と避難者自身の記したエッセイで編集し、発行した。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 関礼子・廣本由香, 2013, 『とすのうた』 関礼子研究室.

④ 関礼子・廣本由香, 2013, 『とすのつむぎ』 関礼子研究室.

④ 2013年12月14日(名古屋市立大学)・環境社会学大会において、「母子避難」に関する研究報告を行った。